
何かのために、誰かのために ～証～

飛亜乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何かのために、誰かのために　　（証）

【Nコード】

N0752Y

【作者名】

飛亜乃

【あらすじ】

ある日、突然強引にAPTX4869の解毒剤を要求するコナン。その時に浮かべた違和の残る微笑みをきっかけに、彼の暗闇は幕を開けた。誰も、想像すらできないその理由とは何なのか…？

1人で2人。その事実はいずれ………………。――。

ベースは、コナンです。新一は度々出てきはしますが、飛亜乃の小説は主に小さな探偵君が主になります。シリアスです。よかったら、ご覧ください。

解毒剤（前書き）

連載です。

久々の新作になりました。

また、不定期的更新になりますが、申し訳ありません。
よろしく願います。

解毒剤

『そんな、強い人間だと思ってるの?』

ただ耳の奥にこびりつくような、彼らしくもない自嘲めいた声。

本気で、彼が偽物なのではないかと疑った。

それを否定してしまったから……

彼は、本当のフェイクを身につけてしまったのかもしれない――
――。

「だーかあーらー。解毒剤の試作品、くれって言ってるだよ」

目の前でモノをよがるように、ぶんぶんと手を振り、何度も同じことを繰り返す。

「しつこいわね、駄目って言ってるでしょ?」

「んでだよ、万が一のために無いと色々と不便なんだよ、分かるだろ」

何が、分かるだろ、なのだろうか。

…受け入れられるわけがない。

小さな科学者は、盛大なため息を吐いた。

「あのねえ、あなた忘れかけてんじゃないの？アポトキシン4869は、とんでもない毒薬なのよ。そんな薬の解毒剤をホイホイ渡すわけないでしょ」

「それだから、万が一の時だけって言ってんじゃないかよ」

「あなたの方が一って、日常茶飯事になりかねないじゃない。乱用なんてしてみなさいよ、死んじゃうわよ、あなた」

脅しでもなんでもない、本気の忠告だった。

さすがに、コナンも黙り込む。

「……3錠は？」

「まだ欲しがる気？」

怒気を含んだ息を吐きながら、睨んでみたものの、確かに少しだけ気になることがある。

こんなしつこく、解毒剤をよがるなんて、今までなかった。

ひよっとしたら、本当に何かがあるのだろうか。聞いてみようと思った。

「そんなに欲しがる…理由があるわけ？」

「…まあ……言えないんだけどな」

そういつて、スッと視線を逸らした。

理由が言えないだなんて、どういふつもりかしら。やはり、彼女が
らみ？それとも……

事件だろうか。

「…一応、聞いてくけど、あなたそんな解毒剤要求してくるけど、
体の負担、耐えられるの？」

「え…ああ……。確かに、きついっちゃきついけど、そんなでもね
えよ。つか、そんなこと聞いてくるってことは、くれんの？」

「2錠だけね。ただし、継続時間とかまだよく分からないから気を
つけて」

サンキュウと言って、それを受け取った彼は、微笑み、錠剤を握り
こんだ。

……これから、行ふことのために……。

何者なのか…何を隠すのか…（前書き）

今回は、今までにないタイプの小説の綴り方、していきたいと思
います。

感想をくださった方、ありがとうございます。

何者なのか…何を隠すのか…

阿笠邸を出て歩いていたはいいいものも、2錠しか貰えなかったのは、少し痛い。

……足りるだろうか。

どう、やりくりすりゃいいかなあ……。

ふと、スニーカーの先端に視線を当ててみた。

今から、俺自身がすることの真意を知ってるものは誰もいない。

誰一人、本当のことを知らない。

俺だけが、俺だけが、知っていること。

確か、持続時間分からねえんだったなあ。

過去にあったのは、24時間とか、4時間とか…それくらいは持ったな。

ギュっと、ポロシャツを掴んで、大きく息を吐いた。

瞳を、伏せはしない。

伏せたら、また鮮明に、甦る。

そう…。誰も知らない、誰にも言えない。

たった1つの事の終末までの、幕。

それを今、開こう。

眩しすぎて、見つめることのできない太陽が、背中を突きさしてくる。

そこから零れる影に、笑顔を隠してしまうように、真実ごと覆い隠してもらおうか。

決して、後ろだけは振り返らないように、ゆっくり、ゆっくり、歩きだした。

「あーあ。コナン君、またどっか行っちゃったあ」

居間の机に頬杖をつきながら、さらりとしたロングヘアーを指で弄んだ。

退屈のあまり、明るい笑い声を発す箱をよそに、ため息をついてしまう。

『蘭姉ちゃん、行ってくるね』

なんて、笑顔振りまいて行っちゃったけど、せっかくの休み、一緒に過ごしたかったな。

それに、ここ一週間、コナン君家にいないし。

毎日毎日、夜遅いし、週に3泊は、博士の家でしたような…。

なんなのかしら、ホント。

もう一度、溜息を吐くと、蘭は立ち上がった。

ふと、机の下に小説を見つける。

「これ：コナン君のかな。…うわぁー…」

開いた瞬間、推理小説だと分かった。

こんな小説ばっか、よく読めるなあ。ずらずらと並んでいるのは、細かい文字。

ていうか、分厚い…。普通、こんなの小学生が読まないよねと苦笑してしまう。

でも、きっと彼は普通じゃない。

あんな小さな子供が、あんな大きな包容力を持つてる。

いいところ上げていったら、キリがないし…。

ほんと、新一にそっくりなんだから…。

でも、本当に、コナン君は…何者なんだろう？

「あのー…佐藤さん。コナン君って、何者なんでしょー？」

今日は珍しく取った休暇。久々に誰にも邪魔されず、二人ゆっくりできていた。

視線を運転手に這わせ、眼を見開いた。

「あらなあに？こんな日に、堅苦しい会話ね」

「すみません…。でも僕、ずっと気になってるんですよ」

異様に真面目な高木の顔に、美和子も眉を寄せた。

「確かに変わった子よねえ。事件現場に遭遇しても、全然怖がらないし…、頭良すぎだし」

「でしょ？」

高木は、前の道路を見つめながらも、あの日のことを思い出していた。

東都タワー。ド真ん中のエレベーター。時限爆弾。1200万人の人質。水銀レバー。

その爆弾を次々に解体していった。

そこに唐突に現れた悪魔の言葉……。

《勇敢なる警察官よ……。君の勇気を称えて褒美を与えよう。試合終了を彩る大きな花火の在り処を……。表示するのは爆発3秒前……健闘を祈る》

あの3秒間で、彼は答えを導き出した。

普通なら、怖がるだろう。爆弾だなんて、それで死ぬだなんて……、嫌だったろう。

それなのに彼は……。

あれからコナン君は、ただ者ではないと認識した。

そして、彼は言った。

「いるかもしれないんだ……そこに……この世で一番死なせたくない大切な奴が……」

だから、問うてしまった。

何者なんだと、君は、一体何者であるのか。知りたくてたまらなかった。

だが彼は、結局教えてはくれなかった。

——知りたいのなら…、教えてあげるよ……。あの世でね……
……

あんなこと、7歳の子供が言うわけがない。

何を隠しているのか。

日々を過ごしながら、何をしていたがつているのか。

あの姿の裏に、一体どんなものを抱えているのか、知りたい。

知りたかった。

前を

ふうと吐いた息が異様に白く見えた。

冬でもねえのに、変なの。

……はあ、ともう一度ため息を吐いた。

ずるりと、滑るように塀に寄りかかってみる。

よく、ここまで……抑えてきたもんだと、自嘲の笑みを浮かべる。

ふと、顔の前で手を広げてみた。

ずっと、否定し続けてきたことなのに……――――。

それを、俺が自ら行うことになるなんて……思ってもなかったな。

誰も予測すらできないだろう。

俺だって、想像すらできなかった『今』がここにある。

……後ろは見ない。なぜなら……

今さら、後ろを振り向いたら、俺は……きつとまた、あの日に戻りたくなる。

きつとまた、この選択を、やり直したくなる。

そして、『これから』をおこなってしまったら……

そこから、『今』という過去を振り返ったら、……俺は、死ぬほど後悔するだろう。

だから、前だけを見るという選択をとった。

何も知らない他人は、前向きだと称えるかもしれない。

だが、違う。

前だけを見ることだけが、正義じゃない。

過去も、今も、全て受け止めて、ちゃんと理解したうえで、反省も悔いも抱え込んだ上で、食い破り、足を踏み出す。

それが本当の、前を見るということを示す。

ちゃんと知ってる。

だから、俺が今している「前をみる」という行為が間違ってることくらい、分かってる。

いつか、こんな日が来るかもしれない……——

そうやって思ってきたことが、いよいよ現実になったってわけだ。

俺も……、人間ってことか。

「あれ…。名探偵？」

その声に、ハッとして、顔を上げた。

こんな真昼間に、白いシルクハットとマント。光を持つ瞳が、じつとこちらを覗き込んできた。

「キ…キッド…？」

「ご名答。そりゃあ分かるよな。こんな格好してるの俺しかないしっ」

目立つよな、とハニカミ笑顔を照らしながら顔を向けてきた。

「昼間からこんなところでうろちよろしてっと、中森警部んとくに突き出すぜ」

フンと、先ほどの自分への嘲笑の余韻を用いながら、鼻で笑った。

「んだよ、そっけねえなあ。昼間から、ギャーギャーしたおっさん達に追いかけるなんて嫌だ。追いかけられるなら、美女がいい？例えば、お前の彼女とか？」

「ぶっ飛ばすぞ」

一気にコナンの目が鋭くなったので、キッドは冗談だよ冗談、と彼をなだめた。

そして、そのままコナンの目線までしゃがみ込んだ。

「で、さ」

「なんだよ」

いきなり、ずいずいと顔を近づけてきた奴に、少し慌てる。

「お前、どうしたの？」

コナンは、思わず息をつめていた。

さっきまであった軽やかな空気は、いつの間にかどこにもなくなっていたからだ。

「…どうもしねえよ…」

「どうもしねえわけねえんじゃないの？」

やはり、真剣な瞳は貫いてくるばかりで、決して揺れない。

そこから、絡み合う視線を外したくなる衝動が、胸奥からもぞもぞと湧いてきた。

「なんで、テメエがそんなこと勝手に決めてんだよ」

「壁に、ずるずるともたれかかったまま動かないし、思いつめた顔してたぜ」

「…そんなん、別に休んでただけだろ」

とつとと、こんな奴と見合っていないで逃げてしまえばいいのだろうが、壁に押し付けられたようなこの状況は、その道を与えてはくれなかった。

「…ふーん、あつそ。別に俺は名探偵が何で悩んでもどうでもいいんだけどね。でもさ…それなら、俺がこうやって心配しちまうくらい表情を、晒すなよ」

「んな顔してねえだろ。てめえのただの思い込みだぜ、そんなもん」

「俺が？…お前さ」

ダンっ！と鈍い音が耳の隣で鳴ったと同時に、白い手袋で覆われた拳が横目に入った。

「ナメてない？俺のこと…」

「……………」

「俺を、そんじよらそこの泥棒と比べんなよ。……それにおめえの目」

「…目？」

「逃げたくて堪らないって、揺れまくってるぜ」

そういった怪盗に眼には、もう怒りを含んだい威厳さはなくなっていた。

「…適当なこと…言うんじゃない」

狭い空間の中、腕を投げるように振って、すぐ横にあったキッドの手を大きな音を立てて、払った。

「……ざけんな。…勝手なことばっか又かすなよ。ナメテンのは、テメエの方じゃねえのか」

まるで怒りを散らすのを堪えているかのように、その口から発される声は震えていた。

そんな彼らの足元を、遠慮がちに風が吹き抜けた。

「そこ、どけよ。テメエ怪盗だろ…探偵なんか心配すんな」

「…名探偵……」

「なんで…お前なんかに、俺が心配されなきゃいけないんだよ。…

……まあでも……」

そのあとに、呟いた言葉は小さすぎる声のせいで聞き取れなかった。

「え、何？」

「……別に。てか、どけつつってんだろ。邪魔」

どつくように、そこから脱し、コナンはすれ違い追い越すようにキッドの視界から外れた。

「…じゃあな、コソ泥さん」

そういつて振り向いた探偵の顔が、微笑んでいたことを怪盗は知らずにいた。

前を（後書き）

今回は、読者の皆様にも、コナン君がどのようなことを隠しているのか、内緒てきな感じで進んでゆきます。

心情とかは述べますが、彼自身が何をしようとしているのかは秘密です。

予想できますでしょうか。

会いに来た理由

いい天気やなあ、なんて呟いてみた矢先、ポケットに入れた携帯電話が鳴動した。

誰やろか。そう思いながら、携帯のディスプレイを見ると、そこには【工藤】とあった。

ここ最近連絡を取っていなかったあいつから掛けてくるなんて、事件がらみかと思いい通話ボタンを押した。

「はい、服部や」

「うん。俺工藤」

「知っとる。ディスプレイに表示されとるからな、お前の名が」

「俺の名ね…」

心なしか彼の声が低くなった気がして、訝しげに眉をひそめる。

「なんや？」

「や、別に。んで…お前…来週あたり、休日家にいる？」

「せやなあ。事件とか入らな、いるで」

「そうか」

「なんでや？こっち来るんか？」

「…どうしようか迷ってるよ。ま、気が向きゃ行くよ」

気が向けば、とは。随分、気分屋な奴だ。

「さよか。ま、いいわ。来るなら来るで、歓迎するで」

「ああ。サンキュ」

会話は途切れたし、話もまとまったのに、何故だか珍しく電話は切れなかった。

まだ、何かあるのだろうか。

「…工藤？どうかしたんか？」

「なあ、服部…」

「なんや？」

先ほどよりも短い沈黙が一瞬、流れた。

「お前さ、もし俺が……………」

「？」

「…………いや、やっぱりなんでもない。もし、なんてくだらねえしな。気にすんな」

「はあ？なんや自分。そのテレビの次回予告みたいな気になる話の区切り方やめえ」

「悪かったって。んじゃな」

突如切れた携帯電話を見つめながら、服部は呆れたため息をついた。

——もし俺が……

あの言葉の続きに、工藤は何を言おうとしたんやろか。

なんでもない、じゃないだろう。

何かあるはずだ。………気になってしょうがない。

あの言葉の続きを、聞ける日は来るのだろうか。

あちらが喋りたがらないのに、無理に聞き出すんは多少気が引ける部分もあるけど、勝手に心にわだかまりを作ったあっちが悪いんや。

…絶対聞いたる。

そう決心をすると、手で包む携帯を、ぐっと握りしめた。

変な切り方しちゃったな…。

無駄な後悔、というのか。もしなんて、仮定の話などしなければ良

かったのだ。

あのしつこい色黒探偵のことだ。

絶対、問い詰めてくるだろう。

その時のことを、想像するだけで気だるくなる。

だが、まあいい。

今までそうしてきたように、はぐらかすことは得意分野なのだから、なんとかできる。

「あーあ………なんで、こんなことになったかな」

何よりの、発端は………

俺が2人で、1人になったトキ。

俺という人間の中には、2つの命が灯っている。

そのことを、軽く考えていた毎日は、もうない。

そんなこと出来なくなった状況に今俺は、置かれているのだから………。

不可抗力。

という言い訳は存在するのかもしれないけれど、所詮言い訳は言い訳だ。

たとえば、八方塞がりという理由があっても。

どうせ、後に残る結末も知れている。

絶望と自分に対する不信が、一気に覆いかぶさるんだろう。

結末に至ったら、楽になれるかもしれない。

だが、それは…極刑。

信じられないほど、傲慢で、許せざる選択。

要は、自分で最低な行為を行い、自分で最悪の刑を用意するだけだ。

いや、刑は、用意されている…のかもしれない。

その前提事項が無ければ、こんな計画立てもしなかったろう。する必要もなかった。

でも、もう俺の力じゃどうしようもない。

決めたから……だから、解毒剤も貰った。

一度、息をつき、弱音を吐きそうになる口を必死に閉じた…。

1週間後、大阪にやってきた頃には、もう空は星をまばらに輝かしていた。

なかなか、躊躇いを消すことができて、気付いたらこんな時間になってしまったのだ。

いるかな、服部…。

腕時計を見ると、短針は7を回っていた。

いつもと容姿が違うせいかな、街灯に照らされる影が長かった。

確か、この辺りだったはずだけど…と、周りを見渡すと服部と書かれた表札を見つけた。

あつた、ここだ。

ひとまず、辿りつけたことに肩を下ろす。

「……………」

呼び鈴を鳴らすと、案外すぐに目的の人物が出てきた。

「今、行きますー」

まだこちらの姿に気が付いていないのだろう。大阪弁のアクセントが目立つ敬語で、こちらに駆け寄ってきた。

勢いよく、目の前にあった引き戸が横に開かれる。

「はいどちらさ……」

目の前の顔を見た瞬間、平次の表情は驚愕に変わった。

「……く……どう……?」

「—————ああ」

そう。呼んだ相手から帰ってきた声は、まぎれもなく工藤新一当人のものだった。

「……!?……くど、おま……戻ったんか!？」

「いいや、一時的だよ。試作品：飲んだだけだからな」

「さ、さよか……。つどないする?家、上がるか?」

平次が驚きを引き摺りながら、提案を持ちかけると、新一は首を横に振った。

「別のところがいい。近くに、公園とかねえの?」

「え?あ、せやなあ……。うん、ちょっと工藤ここで待っつけ。足、持ってくるわ」

「足?..」

「バイクやバイク。歩くとわりと時間かかるんや」

「あ、そういうこと。悪いな」

「ええって」

足早に服部はその場にバイクを持ってきた。

「ほんなら乗れや」

その言葉を聞いて、頷き、後ろに跨った。そして、特に言葉も交わさずに、2人は黙々と目的の場所に向かった。

なんの変哲もない公園だった。

ただ、暗闇の中で設置された街灯に光を授かった遊具や木々が綺麗に見えた。

適当なベンチを探しながら、新一はそういうやさ、と呟いた。

「バイク乗りながら、思い出したんだけど、この前奈良だったか京都だったかで、お前が寺で最後剣で犯人とやり合った事件あったじゃん」

「…ああ、そういうやああったなあ。それがどうかしたんか？」

「んでさ、オメエ一回犯人に弓で狙われた後、バイクで交通法思いつきり無視って、犯人追いかけただろ？」

「え…あ…あれなあ……」

横目で見やると服部は、思い切り顔を歪めていた。

「やっぱ、色々あったんだ？」

「色々あったなんてもんやなかったわ、ま、当然免停くらったやろ。それくらいはまああるやろ思うてたからさほど気にせんかったんやけどな？ そのあとがや」

「そのあと？」

「親父にどん叱られるわ、おかんにもやたらと言われるわ、散々やったんや。犯人追いかけるんに、いちいちそんな先のこと考える余裕ないっちゅうんじゃ。もー…ほんま、あらもう二度と勘弁やな」

「そりゃ怒られるって…」

なんて苦笑してみれば、笑い事じゃないでってジト目で睨まれた。

「悪い悪い」

「ま、ええけど。そいや、工藤、こっちに来た理由なんやったんや？」

思い出したかのように、こちらに首を向けた。

「や…今回はさ、特に理由あったわけじゃねえんだ。会っておこうと、思ってたさ…」

「会っておこうて…なんでやねん？」

一度、新一は俯いた。前髪で顔の上半分に影が出来た。

だがすぐに、平次の方ではなく、ただ真正面の遠くを眺めた。

「……………工藤新一は、これから殺されるからさ……………」

…その言葉に呼応するかのように、あたりの木がざわりと蠢いた。

殺す者ゝ本当の理由を知る者ゝ

隣が存在が、何を言っているのか分からなかった。

——工藤新一は、殺される？

「何…訳わからんこと…言うてんねや…お前が…そない簡単に、殺されたりするかい……っ」

「もう…どうしようもねえんだ……。どう抗っても、工藤新一が死んじまうことは変えられない。逃げたって、変わらない…なぜなら、そいつが出てきた時点で、今の俺は消えるから…」

「は………？」

「………そう…。工藤新一を殺そうとしてるのは…、もう一人の俺である………」

江戸川コナンなんだよ………」

言葉を失った。余計に訳が分からなくなって、驚愕で目を震わし、見開くことしかできなかった。

江戸川コナンが、工藤新一を、殺す………？

「ほんま……訳、わからへん……なんや、それ……。第一っ…お前探偵やろ…！そんなお前が殺すなんて……「分かってる…！」」

言葉を遮るように、唐突に叫んだ工藤に、思わず息を呑んでいた。

「…分かってるさ…！探偵の俺が…、殺人なんて、ありえねえってんだろ…！？探偵と真逆の犯罪者…ずっとそれを否定してきた…：…：そんな人間がつ、殺人を犯すことになるなんて、俺だって、俺だって信じたかねえよ…：！けど…っ、どんなに否定したって、拒絶したって、もう免れられなくなっちまったんだから…：…：っ」

新一は荒ぶる口調のまま、自分の体を抱きしめるように、左手で右腕を強く掴んでいた。

服部は、混乱していた。

彼が苦しんでいるのも、辛いのも分かる。

でも、理解も納得も、うまくできなかった。だから、彼の今の抱えている事実を整理したかった。

「…落ち着いてや、工藤…そうしてくれんと、俺も…よく分からへんねん…：…、せやから、もっと落ち着いて…：…」

「…落ち着けるわけねえダろ…っ！どうやって落ち着けてんだよっ！逃げることもっ、目を背けることもできなくなっちまった今じやっ、もうどうしようもねえんだっ…！だけどっ…：…」

そこで新一は口を噤んだ。暴れる感情を無理に抑え込んだのが、平次にも伝わった。

「…：…：悪い、そうだよな…：…。何もこんなんじゃ、分からねえよ

な……。なのに俺、叫んだりしちまって……」

必死に平静を装う同い年の少年を見たまま、辛そうに平次は眉を寄せた。

工藤新一が、江戸川コナンによって殺される。それによって、彼は苦しんでいる。

そして、工藤新一は二度と……いなくなるということ。

つまり…

「……………工藤、もしかしてお前……………体に耐性できてもうたんか……………?」

図星だと思った。だから、神妙に告げたのだ。

だけれど、工藤は驚いた顔つきをすることも、辛そうに顔を歪めることもしなかった。

ただ、どこか辛そうに睫毛の影によって更に悲しみの色を濃く瞳に宿したまま、微笑んだだけだ。

「耐性……………とは、少し違うのかもしれないな」

「え……………」

「薬が効かなくなったんじゃないくて…、これ以上薬を飲んだら……………。いや、やっぱ何でもない。つまり、まあざっと言えばさ、この姿で会えんの、…最後になっちまうだろうから…間に合わなくなる

前に、お前に会ったときたくて……。――本当の姿でさ」

本当の理由を打ち明けられないのなら、せめて本当の姿だけでも晒しておきたいから。

だから、ここに來たんだ。

そこで、ようやく新一は平次を見た。そして、こちらに來て初めてちゃんと笑った。

「……じゃあな」

「ちょ、待ちいや工藤っ。今から帰るんか？それにこれ以上薬飲んだらって……」

「帰るよ、まだ8時だし。全然東京行きあるだろ。あと、さっきの言葉も、気にすんな。わりいけど、服部んちまで送ってくんね？ここからじゃ、駅までの道分からねえんだよ」

「……………同じだ。」

またこうなる。前だってそうだった。

電話の時、『もし俺が……』の後に、はぐらかすように気にすんなと言ったのだ。

どうしてだろうか。

何故、肝心な部分だけはぐらかすのだろう。

同じ探偵のこの俺に、ここまで違和を感じさせておいて、またはぐらかすつもりなのだろうか。

「…ふざけんなや」

「えっ…？」

服部はベンチから立ちあがった新一の腕を強引に引っ張り、再びベンチへ叩きつけるように戻した。

背に相当の衝撃が伝わったのか、瞬時小さなうめき声が彼の口から洩れた。

一方服部は、それと同時に立ちあがり無理に座らされた新一の前に立ち、その胸倉を掴んだ。

「つどこまで、はぐらかす気なんや！」

もういい加減にしてほしい。

大事なことを、重大なことを何も知らされないまま、中途半端に事実を知らされ聞かされて、彼の本当に思ってることすらはっきりと分からせてもらえない。

そんな中途半端で、いい加減な状態のまま、放置され、知るなど、気にするなという台詞で勝手にくくられるなんて、冗談じゃない。

きつと、俺がそう思うことは工藤にだって分かるはずだ。

だから余計に腹が立った。分かっていて、知っていて、それでも尚騙しはぐらかそうとするさまが、我慢ならなかったのだ。

「ずっとそうやって、自分だけで分かった顔なしとるつもりなんか！んな、アホな真似、ずうっと続ける気なんか！？そない事しとつても、いつかはバレるんやぞっ！」

新一は胸元から締め上げている手を外そうと、その手に強く指を食いこませた。

手首に強い痛みを感じた平次は反射的にその手を放した。

首元を解放された少年は開いた気道に空気を吸い込み、咳き込む。

その咳をなんとかおさめて、鋭い目で目の前の相手を睨んだ。

「……………バレねえよ」

あまりにも強く激しく揺れる眼光に、彼の前に立ちはだかる探偵は言い返す言葉を見つけられずにいた。

「バレちまう程度のことなんて、抱えてるわけねえだろ。お前にも、誰にも、本当の理由なんて知ることなんかできるわけねえんだよ」

威圧感を纏うまま、勢いよく立ちあがると服部を思い切り押し退け、暗い闇の中に消えて行った。

ポツンと佇むベンチの前に残された服部は、ただ漠然と、その背中を眺めることしかできなかった。

殺す者ゝ本当の理由を知る者ゝ（後書き）

また良ければ、感想や意見、いただけると嬉しいです。

抱えているものの大きさ

どうやって、ここまで来たのか分からない。

気づいたら、工藤邸の前に一人、街灯も消えた真夜中に、立っていた。

でも、ずっと、ずっと、服部の言葉が頭にこびりついて消えなかった。

——ずっとそうやって、自分だけで分かった顔しとるつもりなのか！んな、アホな真似、ずうっと続ける気なんか！？

：つもりなんかじゃない。分かった顔してるわけじゃない。

俺だって、分からないことだらけだった。戸惑いだらけだった。

あのまま聞いていたら、せっかく目を反らして決心した過去が、今が、揺らぐ気がした。

簡単に決めたことじゃなかったのだ。だから……あの場から逃げてきた。

今、自分の胸のうちに在ることは、さらりと打ち明けられるもんじゃない。

説明だって、上手くできるか分からない。

——どこまではぐらかす気なんや！

……どこまでだろうか。永遠なんてない。でも、俺には到底予想できない未来までは、きつとはぐらかしてはいるんだろう。

だが、一瞬自分に詰まっている事実を掘り出そうとしてくるあいつが怖かった。

そして何より、瞬間的でも、この口から眠る事実を紡ぎそうになった自分が怖かった。

だから手遅れになる前に、口を噤んだ。

自身の内で暴れる獰猛な感情も、事実も、抑えなきゃいけない。

……どうしても、言いたくない。

そう思った刹那、もの凄い鼓動が鳴った。

——どくんっ……！

唐突な苦しみと痛みに反応しきれなかった体が、門に当たる。がしやんという音を立てて、俺の体はその鉄の柵をずるずると滑った。

ここでは元に戻れない。

その本能が、異常な汗を噴き出す体を無理矢理動かして、なんとか玄関に転がり込んだ。

だがそこまでが限界だったらしい。

異常な熱。激痛。それらが身体を蝕み、拘束するように締め付けていた。

骨が溶け、身体が縮んでいく。そんな奇怪な感覚が全身に走る。

耐え切れず漏れた悲鳴とともに、その姿はもう1つの姿に化していた。

半端でないダルさを残す身体を起こしてみた。

先ほどまであったものとは比べ物にならないほど、小さくなってしまった手を天井にかざしてみる。

「やっぱ……………もう1件分は…、持たなかったか……………」

呟いた声が暗い空間にのみこまれてしまうのを感じると、乾いた笑いを零した。

……………大丈夫……………。

まだ、いける。いけるはずだ。

次が、最後のチャンスになるだろうけど……………。

汗がしみこんだ布を纏いながら、俯いた彼の額からは、一筋の滴が垂れていた。

隣の家からなんだか一瞬、がしゃんという音が聞こえた気がして茶髪の少女はふと身を起こしていた。

こんな夜中に：何かしら？

気のせいかとも思ったけれど、やはり一度疑ってしまったことを抱えたまますんなりまた眠りに付けるほど、素直な性格ではない。

隣のベッドでいびきをかき眠る博士を起こさないように、そっと部屋を出て、静かに家を出た。

しかし、そこには特に何もなく、静まり返るいつもの夜だった。

それに少し安堵し、再び家の扉を閉めた。

しかし一度覚めてしまった頭。すぐに布団で寝息を立てるのは難しい話だと思った哀は、紅茶を入れたカップを持ち、ソファに座りこんだ。

ダージリンの香を漂わせるそれをそっと喉に流し込みながら、つい最近解毒剤の要請をしてきたコナンのことを思い出していた。

試作品を試すなら、それなりに結果を報告してもらわねば困るのだ。

けど：与えた解毒剤を握りこんだとき彼が零していた微笑みがどうも引っかかっている。

なんだろうか？

あれは、再び元の体に戻る高揚感から来る笑みではないように思えた。

だとしたら？だとしたら、一体何なのだろう。単純な危機状況を回避するためだけではないのか。

彼が、解毒剤を欲しがる、もっと、もっと深い理由っていったら……。

あー…駄目だわ、全然分からない。

彼みたいに、心当たりから全てを整理して、パズルを組み立てるように推理していくなんて芸当ができればいいんだけどね。

よく、あんなことができるものだわ。感心する一方、あきれることも度々あるし…。

狂おしいほど興味深いと感じる純粋な心を持った彼。

そんな彼に幾度も惹かれた。けれど、そんな純粋な心を持ちながら、多くの暗黒を持っているのだろう。

それを全く言おうとも、晒そうともしないから、ちっとも分からないのだけれど……

無理して、無茶して、どうしようもなくなった結果が、私たち周りの人間に刃物を向けているのと同じくらい切羽詰めることになることを、彼自身、ちゃんと分かっているのかしら…。

強靱な強さや優しさを抱えていると考えていた思いを、その彼自身に壊されることになろうとは、まだこの少女は気が付いていなかった。

抱えているものの大きさ（後書き）

また、意見、感想等ありましたら、どうぞよろしくお願いいたします。

俺は弱い

目を開けたら、眩しい光が窓から差し込んでいた。

驚き、がばりと起き上がったが、座っている下は、冷たい床。

…ああ、そうだ。俺、昨日、あのまま意識飛ばして…そのまま寝ちやっただけ。

乾いた汗が異様に冷えたせい、身体がだるい。寒気もした。

なんだろうか…。

元に戻ってから、コナンの姿になるときにあったはずの名残惜しさが消えていた。

不思議だった。

何より、元の姿を自身でも望んで、このままで居続けたいと思っていた。

そして、幼い姿に戻るときの悔しさは、底知れないものだった。

そのはずだった、はずなのに……

あのとき抱えていた高揚感も、歓喜の心も、縮んでしまったときの湧きあがる悔しさも、何1つ感じなかった。

なんで……。どこから、そこまで変わったんだろう。

何も分からない。自分のことのくせに……全然分からない。

分かるのは、元の姿になるときも、この姿になるときも、静かな無力感と辛さがあったただけだ。

ちゃんと決めた。自分自身に決心を掲げた。変に大丈夫だという確信をしていた。

それが今は、揺らいでいる。

——確信？

馬鹿馬鹿しい。確信なんて、そう簡単に持ちちゃいけないものなんだ。

確信は、ある小さな種から可能性というものの力を膨張させてようやく出来上がるもの。

そんな課程を吹っ飛ばして、すんなりと掴めるものじゃない。

……何、今さら、気がついてんだ。————遅すぎるよな……。

限りある時間の中で、俺がしなくちゃいけないこと。けじめづけ？……違うな。

思えば、どんな動悸だったんだろうか。

理由を曖昧にしたまま、元の姿で会うべき人間に会って、最後だと伝えて…………。

そして、馬鹿なことを盾にして、そこから自然に消えていく。

誰にも、真実を知られず、ほのかに自分だけで全てを終わらせる。

そうしたら、最低限に抑えることができるんだ。

周りの人間に傷をつける要素を………………。

どうやって考えても、無傷の状態は、無理なんだと感じた。

だったら、少しでも軽減させるしかない。

少しでも…、見る涙を、減らしたい。

——それなんだろうな、きっと。

色々、怖がってるんだ。前に進めてるのかすら不明だし、曖昧だし、全然はつきりするものがない。

それなのに、明らかに、明確に、決るように己の芯に沁みこんでく
ることは止まらない。

少しでも振り切りたくて、立ちあがった。

ダバダボの衣服をまとい、ずりながら歩く姿は、随分無様だろう。

だが、早く脱ぎたかった。脱いで、清潔な香を余すものに、身を包まれたかった。

自分を、ほんの少しだけでもいいから、清浄化したかった。

服を着た。着替えた。今の身体にぴたりと合う。しかし、何も変わらなかった。

「…どうして……………」

どうして、ちっとも変化をもたらしてくれないのだろうか。

どうしてどうしてどうして……………――――
――――

我に返ったころには、頭から痛いほどの雨をかぶっていた。

瞬間の内に、思い切りシャワーのノズルを回していたらしい。

壁に手をつたわせながら、だらしなくしゃがみ込んだ。

「…っ……………俺は……………弱い…っ……………」

まるでその言葉を反響させ、輪唱していくように、空気が振動した。

———全ては、あれから始まった……………。

ある日、解毒剤の作用を起こす発熱と、白乾児を服用する機会があったのだ。

事務所にはだれもいなかったし、条件は完璧だった。

しかし、元に戻れなかったのだ。

いや、わずかな変化は確かにあった。

一度、この身体は、成長を遂げていったのだ。だが、戻りきる前に、再び戻ってしまったのだ。

己の目を疑った。

……………嘘だろうか？？

疑った。しかし、感じてしまった。

荒い息を繰り返しながら、ただ茫然となり固まって、白乾児が僅かに水滴として残ったコップに映った自分を見つめる。

———もう、耐性ができてしまった。

試作品を服用しすぎたのか？だけど。数回しか…。あんな数回で、もう戻れなくなっちゃうのか。

まさか、そんなはずない。

ちゃんとした解毒剤じゃないからだ。そう思った。

だから、こっそりと灰原がいない隙を窺って、試作品を盗み出した。それを飲用すると、なんとか元に戻ることに成功した。ちゃんとした17歳の姿だった。

心底安心した。だがそこでまた、大きな違和感を感じ始めた。

元にちゃんと戻った姿の状態でも、いつも、苦しかった。

脈は速く、頭痛もあった。心臓も圧迫感が常にあった。――異常だった。

もしかして、本当にもう、身体が持たなくなってしまったのか。

壊れかけているのだろうか。

だとしたらどうする。どうするのだ。

まだ解毒剤は試作品段階。完全版なんて、先の見えない未来にある。

だが、これ以上試作品を濫用すれば、服用者のこちらが持たない。

それに、工藤新一は、失ってはならないはずの人物。俺の『本物』で、その『本物』には待っている人間がいる。

下手したら、それを裏切ることになる。

そしたら、目に見えてる。あいつが、涙を流すこと。

その姿は、その姿だけは、二度と見たくないと思っっているものなのに…。

どうして現実はこのなのだ。

深い絶望を味わった。

そして、一度降りかかった悲惨な吹雪は止むことを知らなかった。

耐性と身体で、悩んでいた矢先。

それとはまた別で、蝕まれていることに気がついた。

そう何もかもがそこにあった。

考えれば、その大きな悪魔の軸を舞台に、悲劇は始まったのだろう。

多分、もう1、2回であの急激な肉体変化は限界だ。

しかしそれでも、ちゃんと、もう二度とそのスガタになれる未来がなくても

その姿を望んでくれている人の前へだけは、本物の足で、歩き立ち、話をしたかった。

その変わり、それは毒薬を服用したことにより生まれた『江戸川コナン』が「工藤新一」の人生を背負う。

つまり、後からひょつこりと表れた主人公が、本来の主人公を殺す。失くす。

…ありがちなストーリーだと苦笑する。

だけど、現実には笑えてしまうほど、軽々しいものじゃない。

でも、その江戸川コナンの人生も、随分と限界期間を迫られてしまった。

おそらく、工藤新一がいなくなったら、あいつは…蘭は…涙を滴らせるだろう。

だから、もうそれ以上あいつに、哀しい闇を与えたくない。

殺人者になる江戸川コナンなんて、ひっそりと消えてしまえばいい。

工藤新一と江戸川コナンが同一人物だというまぎれもない真実は押しこめる。

たとえばそれが、本当のことだとしてもどっちみち、現実に見えるものは限られていく。

だったら、結局変わらない。押し込めようがどうでもいいのだ。

そう決めた。

そう。————これが、揺らぎそうでぐらぐらとしている決心だった。

俺は弱い（後書き）

また、感想、意見よろしくお願いします。

元から存在しないもの

だけど、だからこそ八方塞がりの状態に陥っているからこそ、俺は、決めた心を動かしたらいけないんだと思う。

工藤新一は死ぬ。

そして、江戸川コナンも消える。

その理由は、どうしようもない身体の限界。

もしかしたら、俺の命のカウントダウンは、あの妙薬を飲んだときから、始まっていたのかもしれない。

気付かなかったただけで、俺を消滅させる爆弾の起爆スイッチは入っていたのだ。

どうしようもなくしんどい。叫んで泣いて、開き直れるものなら、そうしたい。

でもそんなことじゃ、今感じてる苦しさや辛さは和らげられない。

頭から突き刺してくるかのような水。

それから逃れるために、そこから横にそれて、壁にもたれかかった。とめどめなく滴る雫。それを見つめながら、瞳に膜が張り詰めるのを感じた。

そうだ。…それでも…、それでもやっぱり、限られている時間だから、今の自分でも、大切な奴のために使えることを感じたい。

それしかまともである理由がないのだから。

R R R R R R R R R R

電話が鳴り響いたのを耳に感じて、切れないうちにさっさと受話器を手に取った。

「はい阿笠です」

澄んだ少女の声を聞き取ったなり電話の向こうの相手は唐突に叫んだ。

「工藤出せや工藤！！！そこにおるやろ！？ええ！？」

その騒音ともいえる大きな声を頭に響かされた彼女は、思い切り眉をしかめた。

「なんなのあなた。第一声がそれ？ええ！？じゃないわよ。ふざけないでくれる？」

「ふざけてなんかあらへん！で。工藤は！？」

「いないわよ。ここに住んでるわけじゃないんだから」

と返してやれば、そんなはずあらへんと大反論。

「うるさいわね。だったら確かめにくればいいでしょ!？」

「ああええわ!行つたる!事務所におらへんならそこしかないわ!」

そう言つたきりブツツと通信されていた電話は切れた。

本気で来る気なのかしら……………。

でも事務所にはいなかったって言つてたわね。

だからって、今日は休日。普通、どっか行つたとか考えないのかしら。

だいたい彼の携帯に連絡すれば済むものなんじゃないの？

それも駄目だったってこと？

異様に、怒つてたし…。

だからって直接関係してない私に当たらないでほしいわね。

盛大なため息を吐いた少女は、再び眉をひそめた。

電話を切り次第、思いきり走っていた。

あの時、ただ呆然とするしかなかったけれど、時間が経つにつれて
なんだか腹が立ってきた。

——バレちまう程度のことなんて、抱えてるわけねえだろ。お前
にも、誰にも、本当の理由なんて知ることなんかできるわけねえん
だよ。

オマエニモ、ダレニモ、ホントウノリユウナンテシルコトナンカデ
キルワケネエんだヨ

確かにあいつはそう言った。

つまり、自分だけが分かってるということ。

また抱え込んでいるということ。

何で、あいつはいつもあなのだろう。

たった1人で無茶をして、抱えて、平気な振る舞いをする。

俺は、同じ探偵だから、あいつの困惑も分かる気がする。

戻れないと言っていた。

だけれど、それだけじゃないんだと思う。

あのあとに何を言おうとしたのだろうか。

工藤新一に戻れない。江戸川コナンになる。

江戸川コナンに………なるんやろ？

でも、あいつは、江戸川コナンは殺人者呼ばわりした。

でもそれは違うのではないか。

確かに、本当の姿は工藤新一なのかもしれないけれど、江戸川コナンだって、大切に思われているあいつ自身。

それをそんな邪険に、適当に、犯罪者呼ばわりしていいわけがない。

だから、それも伝える。

そのために、あいつのもとへ走っていく。

ようやく着いた。

乗り物に乗っているとき以外、ほぼ走ってきた。その為、肩が上下するほど息が荒れていた。

ノックもベルも鳴らさずに、阿笠邸に押し入ると、案の定不機嫌な顔が、こちらを見ていた。

「まさか、本当に来るとは思ってたわね、少し」

「当たり前や、俺は有言実行の大きな男やからな。で、工藤ほんまにおらへんのかい」

「だから最初からいないって言ってるでしょ。しつこいわね。携帯は？繋がないの？」

「繋がらん。こっちに来る途中も、なんべんもしたけどな。1つも通じんのや」

「そう…。ま、何でもいいけど、工藤君になんかあるの？」

その質問に、服部は頷いて、昨日あったことを昨夜あったことを話した。

それを聞いた、哀の顔は愕然としていた。

「……………どういふ……………こと……………?」

その反応を見た服部もまた啞然とした。

「どういふことで…、あんた工藤から聞いてなかったんか？」

「聞いてる…わけないでしょう……………?もう戻れないって…本当にあの人言ったわけ…?」

「あ…ああ…」

「訳、分からないわ…。絶対何か隠してる…って証拠よね。そうなたら聞きださないとけなさそうね…」

もしかしてまだこの彼女に伝えるには早すぎることだったのかもしれないと、平次は事情を話してから少し後悔していた。

でも、何かを隠すあいつが悪い。

白状させてやりたい。…いや、させなきゃいけない。

工藤が、隠そうとすることは、だいたい酷いことだった。

だから尚更………………。――――。

「ねえ、ちょっと」

「えっあ、なんや」

「ここにも事務所にもいないなら、工藤邸行ってみない？もしかしたら、いるかもしれないでしょ？」

「ああ…そうやな」

そして工藤邸のベルを鳴らしてみると、反応がない。

「おらへんのか？」

そういつて勝手に侵入し、玄関の取っ手を回してみると、――開いた。

「…あ」

「…いるってことなんじゃない？」

「せやな…」

しかし、探すまでもなくそこに目的の人物は佇んでいた。

全身びしょびしょで……………――――。

「…え…何でおめえら…」

「っ…あなたこそ、どういうつもりなの!？」

いきなり隣で叫んだ茶髪の少女に、こちらが驚いた。

「どういうって…何が、だよ…」

「とぼけないでっ…!っどういう意味なのよ!―――もう戻れないって!」

その言葉に、コナンの目は大きく開かれた。

「なんで…オメエが…それを…」

「すまん…工藤」

謝った服部に理解したのか、彼は舌打ちをした。

「余計なこと…言ってるじゃねえよ」

「なんで早く言わないの…。耐性ができちゃったってことなの…？」

「…そうなんじゃないの」

「ちよっとっ！何でそんなに投げやりな態度ができるのよ！？それが出来てしまうことは、あなたの本来の姿が失われることになるのよっ…！？」

「っ…。分かってるさ、そんなこと。俺だって、馬鹿じゃねえんだから、それくらいすぐ分かる。でも、色々悪運重なっちゃったし…？それに、これは俺の問題だ。オメェにだって関係ねえよ」

「…なあ工藤…やっぱお前、それ…変とちゃうか…？」

ぽつりと呟いた服部に、首を傾げるかのように工藤が視線を向けてきた。

「お前…前、自分のこと…工藤新一は、殺されるていうた…そして、殺人者になるのは江戸川コナンやて…そう言うたよな」

「…ああ」

「やっぱそれ…絶対おかしいと思うんや。…なんや、俺から見ると、お前、自分自身の中にある江戸川コナンを邪険に扱いすぎに見える…。江戸川コナンにやて、大切に想うてくれてる奴いっぱいいるんとちゃうか…。工藤新一と、同じように…」

心を抉るような感覚が頭を突きぬけた。

ずっと頭の奥底で引っかかっていたことだった。

「……るせえな……！だからなんだよ！テメエに何の関係もねえだろうが！っ江戸川コナンをどう扱おうと関係ねえよ！俺の問題だっつてんだろ！」

「くど……」

「コナンが誰にどう想われててもっ、所詮コナンが工藤新一の中の偽りの人生でしかないことには変わりはない！江戸川コナンなんて、————元々いないんだ！」

全身が濡れて、どこから水が滴っているかなど分からないはずなのに、蒼い光が灯るそこからは、ただ一点伝う者が見えた。それは、ただの水でしかないのか、涙であるのかは分からない。

「そんな奴、どこでどう扱われようがどうだっていい！だから最初から時間を決められた！いちゃいけないはずの存在が、いるべき存在をもみ消すことになるんだからっ……！っ誰にも言いたくねえ！言ったら、また誰かが暗闇を背負う！っもう俺はっ……俺のせいで流す涙もっ、無理に笑う姿も見たくないっ——————！」

「……工藤君……」

「っ二度と嫌なんだっ……！俺が無茶するとかっ、みんな言う！でもっ、本当に苦しんでんのは俺じゃないっ……！みんなの方じゃねえかっ！服部だっつてっ、灰原だっつてっ、蘭だっつて……俺が何か聞いたって平気なふりをするっ……！辛くて、言いたいことあるはずなのにっ、黙ってるじゃねえか！」

叫び続ける所為で、コナンの声は枯れていく。でも、それに構わず、とどまらない心情を言い続けた。

「その原因を作ってる俺がつ、これ以上原因を作る様な真似、できるわけねえだろうが！」

だから、どんなに聞かれても、問われても、気付かないふりをして、逃げてきた。

「たとえばその場のオメエたちの雰囲気を押されて、知りたいからとせがまれて、口から本当のことを話したとしても、改善されたと思うのは、その時だけっ……！時が立ち、ちゃんと事実に向直ったその時、オメエらがどんな顔をするのか目に見えてるっ！——その場の感情に流されてっ、後に死ぬほど後悔するのだけはっ二度と嫌なんだよっ……！」

好奇心という名の一時の感情にせがまれて、取り返しのつかない偽りの人生を送るようになってしまったときの様な思いだけは、もうしたくない。

「————嫌なんだよっ……！」

必死だった。

だから、これで二人に納得してもらえなかったら、もう後がない。

そう思っていた。

反論を浴びるかもしれない。

呆れたように、踵を翻されるかもしれない。

でも、これ以上聞かれたくはなかった。

しかし…

「工藤……………お前、優しいなあ……—」

実際に開かれた口から出されたのは、予想も想像も絶するものだった。

元から存在しないもの（後書き）

文章構成って難しいですね。

また感想等よろしくお願いします。

思いの錯誤（前書き）

暗いですね…。

思いの錯誤

「工藤……………お前、優しいなあ……………」

コナンは、彼の口から発された言葉に目を見開いた。

——優しい？

信じられなかった。そんなわけない。

自分の弱さのために、結局こいつらを苦しめている。

それなのに、何故？

「そこまで他人のこと考えて、そのうえで悩んでるんやろ？そない苦しんでまで…。やっぱ自分、ごつつすごいわ」

白い歯をのぞかせて笑う。

少年は、服部の言うことに納得ができなかった。

…そうじゃない。そうじゃないだろう。

うまく区切りがつけられないままグダグダと事を引き摺り、何もかもが中途半端で…

抗えない、もがけない。それが、どれだけ情けないことなのか……

そして、自分の中に2人の存在がいる残酷さを…………

お前は、知らないだけだろう。

「けどな。ごつつすごいけど、お前どうしようもなくアホや」

もう彼の目に笑みはなかった。ただ一途で真剣な光を抱えている。

「どない理由でそこまで追いつめてるんか、お前が言わんからさっぱり分からん。…確かに、江戸川コナンは架空の人物と称されても、おかしくないものや。けど、だからてな、江戸川コナンがどうなってもええなんて理屈、通用せえへんで」

キッとコナンの瞳を見据えると、彼の体はびくつと震えた。

「なんで…………そこまで粗暴に扱うんや。お前の理由聞いてもやっぱ、理解できんねや。偽りの人生ゆうて、…そんなんで、その姿の人生扱ってええんか。そんなふうにくくってしもたら、お前がその姿で過ごした時間は、どうなるんや。その間に、出来た大切な存在もまた、偽りにしてまうつもりなんか？そないこととしてもうたら、お前だけやのうて…」

「言うなっ…！」

唐突に叫ばれた声に、今度は服部が目を見開いた。

「もうそれ以上、言うんじゃねえよっ…！」

「…………せやかて、自分…」

「うるせえ。もうお前に何も言ってほしくねえ」

本音だった。

こいつの言葉は、あまりに正当すぎて、聞くのが苦しくなる。

嫌でも、耳にべったりと張り付いて離れない。

言われなくたって全て分かっているのだ。

俺は…、分かった上で、多くのものから目をそらしてる。

ほら、こうして少し離れたところに居る色黒の少年からも…………

「なんやほんまにお前むかつくわ」

いつの間にか、目の前に来ていた彼に心底驚いた。

いきなり肩を掴まれ、壁に思い切り押しつけられた。息が詰まった。

——昨日と似た状況だな。頭の隅で冷静に思い出す。

「そない俺にうだうだ言われたなかったらな、全部話してみい。自分だけ分かって、こっちに何も言わんちゅうんが、我儘すぎるんや。それで、何も言うな言われて、はいそうですかって頷けるかい」

淡々とした物言いのわりに、どこか荒々しさが含まれたような震え

が混ざっていた。

その証拠に、肩を掴む強い力は、さらに増している。小学生である薄い肩は、その力に悲鳴を上げ始め、連動するかのように、コナンの顔は歪められた。歪められたその顔で、口元だけは冷酷な笑みを浮かべる。

「じゃ、黙ってほっときいいだろ。お前が納得できなからうが、関係ねえつつってんだろ。…しつこいんだよテメエは」

辛辣すぎる台詞に、遠くから「ちよっと…」と不満がまざる声が聞こえる。

「いい加減にせえや…。なんなんや自分…。お前が散々何かあるよな言い方しよるから俺は気になるんや。そない関係ないなんて口聞くくらいやったらな、最初から何か吹きかけるような真似するんやないわ!」

「…黙れよ」

「黙るかボケ。ほんまふざけるんやないぞ。実際さっきだってそうやないか。色々悪運重なったって…そんな分かりやすく何かあること晒しといて、それで関係ない言うのはおかしすぎるんや。結局お前は強がってるだけで、ほんまのほんまは、誰かに聞いてほしいんやないか…? そうや、絶対そうや」

「黙れ! でたらめばっか抜かしてんじゃねえよ!」

そう叫びながら、悲しみの光がその目で波を立て始める。

「でたらめやない。そんなことお前やて分かっとなるんやろ…！分かっててその事実から背いて…――」

「もう言うな！」

「言わんでいられるかつ…！このまま俺が引きさがってしもたら、お前また心閉ざすんやろ！？…っ俺はただお前と真っ白で綺麗な交友関係を築くためにこうして叫んどるんやないぞ！お前がっ！お前が前みたいにただ一心に何かに取り組む姿で、おれるようになってほしいから！せやから…っ――――」

こうして、お前を追い詰めるようなことしとるんや。

そう続くはずの言葉が消えていた。

「言う、んじゃ…ねえ…」

押さえつけている身体が壁に寄りかかりながら、崩れていく。

苦しそうに辛そうに顔を歪めながら、床に座りこんだ。

「く、工藤？」

息が荒く、目も赤い。

「放せ………。つか…も、マジ帰れ」

そう紡ぐ声は低く、険しかった。

「なんか、もう…よくわかんなくなってきた…――――」。

色々考えっから…今日は、帰れ」

どうしたのだろう。

さっきまでの荒々しい威厳は急になくなってしまった。

静かな、無を表す様な空気が彼自身を包んでいる。

「灰原」

ふいに呼ばれたことで、驚愕の色が彼女の顔ににじみ出た。

「わりいけど…適当に、蘭に連絡入れといて…。今日は、帰れそうにねえわ…」

「……分かったわ」

さんきゅうと、口の形が告げる。

「服部…も、また落ち着いたら話したい。…今は、もうオメエを傷つけることしかできなさそうだからさ」

「さよか……でも、もう嘘は堪忍やで」

そう言って、服部はその手を話した。酷く赤くなっていて、相当な力で手首を掴んでいたのだと気がついた。

その手首を、もう片方の手で掴み、脱力したかのようにだるそうにその手を下した。

放心しているような表情で、こちらをぼんやりと見据えてきた。

「…分かったよ…。またいつか、時が来たときに全て伝える」

「頼むで…」

2人とも真剣に言葉を紡ぎ、叫んだ所為で疲労感に浸されていた。

疲労感と不調をも、背負ったコナンは、壁にもたれたまま、家を出る服部と灰原を見送った。

ふ、と微笑んでみる。

——— お前の気持ち、すげえ分かったよ。

そして、決心に区切りがついた。

…………… やっぱり、俺は誰にも残酷な真実は告げられないよ……………

彼を包むもの

やっぱり真実は告げられない。

告げるには、お前の真っ直ぐな意思と優しい心には、重たすぎるよ。

瞳を伏せたまま、心の中でそう呟くと、コナンはゆっくりと立ちあがった。

阿笠邸にどこか深刻な顔つきをしたまま戻ると、平次と哀はどっとソファ―に腰かけた。

「…………工藤は…………えらく苦しんどるやな…………さっきの見て、ほんまに想たわ…………」

「…あら…、さっきまでは威勢よく彼に怒鳴り返してたくせに、だいぶ弱気な声出すのね」

「そ、そら…俺やて、あんときは必死やったけど…せやけど、あいつの叫ぶところ…姉ちゃんも見たやろ」

「…………ええ」

彼の言いたいことは分かる。

——言うな！それ以上言うんじゃないよっ……！

——テメェに何の関係もねえだろうが！っ江戸川コナンをどう扱おうと関係ねえよ！

——所詮コナンが工藤新一の中での偽りの人生でしかないことには変わりはない！

——そんな奴、どこでどう扱われようがどうだっていい！だから最初から時間を決められた！

必死に、辛そうに、叫び言葉を発す姿。

身体の所々で、水を滴らせて、あの蒼い瞳を自分への怒りと悲しみで揺らしながら乱れる姿。

——っもう俺はっ……俺のせいで流す涙もっ、無理に笑う姿も見たくないっ——！！

彼の優しさが、また残酷に彼を追い詰めているのだろう。

だから、哀しくて、辛くて、過酷なほど心身ボロボロにして……

――。

一体何を隠してそこまで……………

そう考えた刹那、頭にさっき甦った言葉の一部が再びよぎった。

『だから最初から時間を決められた』

……………あ……………

待って、どういうこと？ 最初から時間を決められた？ それは本来の姿のこと言っている？

…いや違う。

その直前に言っていたことを踏まえれば、その対象はおそらく《江戸川コナン》の方。

哀は、考えながら戸惑ってくると、手の平は額に持っていくと前髪をぐしゃりと掴んだ。

こめかみから汗が伝う。

…それが、意味するのは、つまり……………

彼の命の期限が…それほど長くないことを彼が把握してるってこと？

…ちょっと…待ってよ…。

理不尽にも、程があるんじゃないか。

身体に耐性が出来てしまったから、元の姿には戻れなくなった。

…?…

そこでまたふと疑問を感じた。

今の状態で、耐性ができたと感じる状態でも、薬の向上をすればなんとかなる可能性が高い。

そんなことくらい、彼なら考え及び付くはずだ。

それなのに、あの乱れ様となるということとは……他にもっと、もっとその考えを断たされるような、前提的な理由があるはず……。解毒剤を服用できなくなる理由……ってことだから、その対象に何かが起こっていることで……。

頭がこんがらがり、痛くなってきそうな状態から必死に働かせる。

単純に、単純に、考えろ。

解毒剤が…服用できない状態……そのままってこと?

身体が、そうなってるってことなの?

あなたは、そんな残酷なことを抱え込んでしまっているの?

何故だろうか……――？

頭の中に多くの闇を抱えてどうしようもなく暗い瞳をし、一人佇む姿の幻像が浮かんだ。

浮かんだ途端に、ぷつりと涙が目から零れた。

横に座る少女が、あまりに珍しすぎる姿を晒していることに、服部は心底驚いた。

「――え……っね、姉ちゃん、どうしたんやっ……！へ……！？」

普段クールで、素っ気ない態度ばかりの彼女が、こんな、涙を流すなどと誰が思い至るだろう。

「……彼は……」

「えっ？」

「彼の中は……残酷な悲哀ばかりよ……」

たった1粒の滴が、その太ももに落ちた。

彼を包むもの（後書き）

今回は短くてすみません。

悲しい遂行

「彼の中は……残酷な悲哀ばかりよ……」

ウェーブのかかった茶髪が、俯いたことで揺れる。

残酷な、悲哀。

その言葉そのままだと思う。

それを共有したような感覚を身と頭に感じた途端、生理的な涙がこぼれたのだ。

「姉ちゃん……」

「彼は……、もう、元に戻れない……。身体が、もう駄目になってしまったのよ……。本当の、真実は分からない……。でも……、もう彼は、どんな手も、尽くせない身体になってしまったことを……感じたのよ」

服部は、眼を見開いた。

——どんな手も尽くせない身体……

自分自身、考えて至った最悪の推理だったことを、他人の口から聞

くと、余計に卑劣な事実を突き付けられた気分になる。

「……っ」

「今私が言ったことに増して、彼はその真実を抱え込んでるのよ……。知ってる……？彼はね、“本当に”辛い時は、誰にもそのことを晒さないのよ……。」

シッテイル。

嫌というほど知っている。

「…せやな……。……なあ姉ちゃん」

返事はなかったが、空気で彼女が言葉の続きを聞こうとしてるのが伝わった。

だから、服部はそのまま言葉を続けようと、ふと顔に陰を落とした。

「あいつ……。ほんまは、誰にも……。誰にも、心開いてへんのやないか……？」

ひゅっという音を立てて、無理矢理哀は息を吸い込んだ。そうしてしまうほど、苦しくなった。

「江戸川コナンになるまでは分からんけど……。少なくとも、幼児化してもうた後は……」

…もし、本当にそうなら、これほど悲しいことはない。

元組織の一員であって、お姉ちゃんを殺害されて、信じられる者な
どもう生まれないと思っていたこの自分でさえ、今は色々な温かな
存在に包まれて、心を開いている人物がそれなりにいる。

彼だって、その一人だったのだから。

だが、その彼は、あれほど信頼感を雰囲気で醸し出しながら、彼自
身は誰一人、心を開けていないのだろうか。

だったら何故、周りの人間をあそこまで、必死に守ろうとするのだ
ろうか……――。

――……………

机上にあるバイブが振動する携帯。それに驚き蘭は、暇つぶしで読
んでいた文庫本から、顔を上げた。

（いきなり振動するから、びっくりしたあ…）

そう感じて、息を吐きながら、携帯を開き【受信メール1件】とさ
れているところから、受信ボックスを開いた。

しかし表示されている送り名を見て、ふいに握っていた携帯を落と
しそうになった。

「…新からだ………」

今、一番会いたいと願っている彼。

そんな彼から、メール。なんだろうか。

まさか、東都タワーの事件のときみたいに、今やばい事件に関わっているからあんまり電話やメールをしないでくれ、とかじゃないわよね。

たかが1通のメールを開けるのに躊躇うのは、相手が想い人だからだろう。

自分自身を高鳴りから抑えると、メールを開いた。

『今夜会いたい。会えば、9時ごろに外で。』

うそ…。じゃあ、新一は帰ってくるの？

嬉しさと滲みそうになる涙を、必死に堪えて、急いで返信した。

大丈夫だよ！外って事務所の下でいいのかな――

と、カチカチと早まる心臓の鼓動のリズムに乗るように、キーを押していく。

会える。やっと会えるんだ。

電話でもない、写真でもない。

ちゃんと実体として、会うことができるんだ。

嬉しい。

きゅつと携帯を胸に当て、握りしめた。

一方、彼女に送信した張本人はメールを打った後、声に出さず笑った。

震えが止まらない手で携帯を持ちながら……。必死に計画を遂行するため……。

だってもう俺は…

————決して、止まらない。

悲しい遂行（後書き）

また感想や意見、よろしくお願いいたします。

別れゝ好きだよゝ

【着いた。降りてきて】

いつもと変わらない、ちょっと素っ気なさのある文面だったけれど、着いたという内容に、胸を満たされた蘭は、急いで階段を駆け降りました。

もう9時になった時間帯。

当然空も、周りも暗い。1階のポアロも閉店の札をかけていて、電気も付いていない。

それでもそこらにある街灯の明かりが、そこに居る人物を浮き立たせているように見えた。

「……蘭……」

ぽつりと、私の名を呼ぶ彼。

これは正真正銘、彼自身の声だ。

ずっと、ずっと待ち続けてきた、待ち焦がれていた声だ。

ふ、と、柔らかい笑みをこぼす彼。

だけど、その笑みはなぜか、もの寂しげなものだった。

それに、疑問を持ちかけた刹那、温かな腕に包まれていた。

「しん、いち……………」

まるで壊れものを扱うように、優しく抱きしめてくる手。

「……………らん…」

1度目と違って、酷く緩慢な口調で告げられる。

「ごめんな……………」

なに……………?

「な…なんで、謝ったりするの?」

待たせたな、とか…ただいま、とか…私はそういう言葉を期待して
たんだよ?

なのに、どうして謝ったりなんてするの?

「俺のこと…ずっと、待ってて、くれただろ……………」

「…うん…っ」

電話なんかじゃ物足りなかった。

笑った顔が、からかった顔が、得意そうな顔が、ずっと見たかった。それが叶うという事実が、もう目前にある。だからそれを、確認したかった。

「やっと……、帰ってきてくれたんでしょ？」

蘭のその言葉に、新一は唇をかみしめていた。

……ごめんな……。ごめん、…蘭。

「帰ってこれんのは、—————今日が、最後なんだ……………」

は……………？

一瞬目の前が真っ暗になった。

「おめえには、もう、会えねえ…もう二度と……………」

「…や…やめてよ…！」

ドンと、新一の胸を押し返す。息が荒くなる。心臓がうるさい。

「会えないって何…？冗談でしょ…？」

彼は、首を縦に振ろうとしない。

「…っどうしてえっ…！？ずっと、待ってたんだよっ…！？」

少年は、相手の言葉を聞くように、ゆっくりと瞳を伏せた。

「どんなに言ってもなかなか帰ってこないからっ…すごく心配してっ」

…知っている。

「時々帰ってきてても、なかなか会えなかったから、寂しくてっ」

…痛いほど、知っている。

「やっとっ…会えたんだって、嬉しかったの…なのに、それなのに…なんでそんなこと言うのよおっ…！」

散々見てきていた。

連絡のない電話を、切なそうに見つめる姿。

姿を見せない自分に対して、文句を言いながらも心配してくれていたところも、全部見てきた。

この行動は、間違っていたのだろうか……

いっそ、永遠に姿など見せず、静かに工藤新一を終えていたら良かったのだろうか。

そうすれば、ただでさえ安泰な地位にないこの身体にも負担をかける量を、減らすことができていただろう。

そっちの方が…よかったのか…？

——いや、それでも、蘭にはちゃんと新一ともう絶対に会うことができないと告げておくべきだ。

そうしなければ、蘭は、永遠に、新一を待ち、挙げ句には叶わない望みを持たせ続けてしまう羽目になるのだから…。

それだけは是が非でも、避けたいこと…。

けど、やはり謝罪の念は溢れ続ける。

ごめんな…と、何度言ったって足りなどしないだろう。

でも、どうしても、工藤新一が死ぬ事実だけは、変えられないんだ。

もう諦めるしか、俺には方法が……………

「また戻ってきてよ新一 いっ……………」

涙もまじった声の振動が、身体の芯に伝わってくる。

おもりがついたような瞼をそっと開ける。

目の前の彼女は、目もとを涙でぐちゃぐちゃにしていた。

胸が痛い。本当にそんな感覚が、身体を突き抜けた気がした。

「……これは、マジで…どうしようもなくって…オメエの期待に何1つ答えられなくて、悪かった」

「っ…」

「ごめん」

「…っもう謝らなくていいっ…!」

「……蘭」

ひっく、と嗚咽を出しながら、涙をぼろぼろと、流した。

制御がきかない雫は、とめどめなく溢れてくる。

「—————今までずっと、ありがとう」

瞬間、呼吸が止まった。吐こうとしていた空気もすべて消えた。

その言葉は、生々しく、新一との生活に完全なるピリオドを打つということに感じられたから。

そして、踵を翻そうとする彼…。

その彼の腕を必死に掴んで、引きとめた。

そんな新一の顔は、とても穏やかだった。

「……もう、ほんとに、会えないんだ……」

「……………ああ……」

「じゃ……、1つだけ聞いてくれない……？ずっと、言いたかったことがあるの」

両手でぎゅっと彼の腕を掴む。

言いきるまで、決して目を逸らしてほしくない。そう願いをこめて……………。

「好きだよ……………新一」

別れゝ好きだよゝ（後書き）

また意見や感想等よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0752y/>

何かのために、誰かのために ～証～

2011年12月3日19時53分発行